

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



木津和分教会

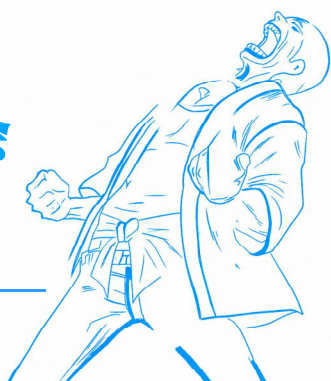
明治31年11月18日 設立(牛込部属南郷分教会)
昭和26年10月26日 所属変更・移転・改称
令和6年3月26日 神殿建築

立教189年11月23日(月)午前10時(9時受付)

天理教青年会笠岡分会

青年会長様御臨席総会

～親孝心を、生きる～



立教189年
8月号

おつとめ・式典
感話・抽選会(16時終了予定)

令和8年

英語講習会開催

海外部

海外部(上原志郎部長)は8月7日、英語講習会(Kasaoka English Camp)を開催しました。

暑さはあるものの時折強く吹く風が猛暑を和らげてくれました。

学校で習う英語は文法重視で会話が上達しない現状の日本の英語教育。いつしか英会話が不得意になる人も少なくない。そんなコンプレックスを払拭するが如く海外からの旅行者に英会話をしながら倉敷の街を謎解きをしなが

ら散策していく。今年もそんな楽しい効果的な講習会になりました。

スタッフと参加者26人は5グループに分かれてそれぞれにゲーム感覚で競い合いました。小5から70歳の参加者は終わった後に楽しかったと口々に感想述べてくれました。

これから先の人生で更に英語を好きになり、海外へ興味を持ち国際的な思考を持つきっかけになればと思います。

ゲストやスタッフによる前日からの準備のお陰で無事に遂行する事が出来ました。本当に有難うございました。感謝。(海外部長 上原志郎)

スタッフの声

芳井分教会 佐藤孝祐

日本に住んでて普段英語を話す機会のない僕たちにとって最高の機会を得られたと思う。来てくれた皆さんにとつて何か変わるきっかけになるかもしれない良い時間だった。

日本人は英語が話せないのではなく、自信がなかったり、失敗を恐れるという国民性がそうさせてるだけで、一歩踏み出して話しかけてみると、結構話せるもんだなと思った。それが参加者の方々に経験を通して感じてもらえたら嬉しいなと思う。

子ども達も拙いながらも案外伝わる英語に驚いていたが、それが自信となつて、どんどん勉強して、思い切つて海外に出ていく人たちが参加者の中に現れてくれたりしたら、それほど喜ばしいことはない。

自分はほとんど英語を話せないままアフリカのケニアに行つてもう5年が経つが、喋れる英語の技量に比例してさらに深い関係を作れるようになったと思う。

英語を話せるように後押ししてくれるこの講習会はすごい価値があるものです。来年も楽しみにしております。



それぞれのチームで英会話を楽しみながら謎解きゲームを楽しんだ

参加者の声

直轄 池田 智恵子(中一)

私の学校では、英語の授業の最初に洋楽を歌います。私はその時間が好きで、家でも習った洋楽を歌うことがあります。でも、実際に会話をするとなると、歌うときよりも緊張するのだと、もつと会話ができるようになっていと思っています。

私たちのチームは「好きな日本の食べ物」をビンゴのテーマにしました。チームで質問を分担して、ビンゴのマスが埋まったときにはとても嬉しかったです。質問をする、予想と違った答えが返ってくることもあり、私が思う日本のイメージと海外から見た日本のイメージは少し違っているとわかりました。

また、外国の方は話しかける前は怖そうだと思っても、実はとても優しくかったです。外国の方と自分との間に壁があると、勝手に思い込んでいたことに気づけました。

今回のEnglishセミナーを通じて、いつもの授業より生きた英語に触れることができたと思いました。これからももつと英語を聞いたり話したりでき

るように頑張ります。

▼English Campに参加して

金浦分教会 樋上 智晴

この度、教会の先生に誘われ、初めてEnglish Campに参加しました。当初は、どういった内容がよく分からず、また子供たちの中にまざってアラフオーの自分が参加して楽しめるものなのか、そもそも英語はほとんど話せないのに、といった不安がありました。ところが、当日、スタッフの方からレクチャーを受けて概要が分かったと、早く現地ですてみたいと思うようになりました。倉敷に到着すると、「あの人たちに話しかけようや!」と、グループの中で自分が一番テンションが上がっていました。中学・高校時代の自分であれば、恥ずかしくて外国人に声をかけられなかったかもしれせん。不思議と大人になった今は、抵抗感や羞恥心は無く、むしろテレビ番組の「Yes!は何しに日本へ?」の感覚で、来日した外国人とコミュニケーションをとることへの楽しみで一杯でした。スタッフの方々には、食事の準備から、手の込んだ問題を作ってくなど、子供だけでなく大人も楽しむことができま

した。来年はさらに英語を上達させて参加したいと思っています。

高屋分教会 大山亜蓮(中一)

僕は初めて英語講習会に参加しました。最初は、外国人に英語を伝えられるか、勇気を出して話しかけられるか、一緒に回る人たちとコミュニケーションを取れるか不安でした。しかし、大教会で自己紹介や話し合いをするうちに、少しずつ仲良くなることができました。

倉敷に着いてからは、外国人に話しかけることになりましたが、最初はなかなか勇気が出ませんでした。それでも、好きな日本料理や好きな日本語を聞くことができました。好きな日本語では、「こんにちは」「おはようございます」「ありがとうございます」と答える人が多かったです。また、どこから来たのかを聞くと、フランス、ノルウェー、イタリアなど、いろいろな国から来ていることが分かりました。

問題を解くときは、スマートフォンを使わず、地図だけで目的地を探したので、道を間違えることもありましたが、ビンゴでは、10組くらいの人に聞きましたが、2つしかマスを埋めることが

できませんでした。他のグループは3つもビンゴになっていて、すごいと思いました。

最後の感想を言う時にゲストのマックスが日本語を喋っていてビックリした。英語講習会が楽しかったから来年も行きたいなと思いました。



お互いのチームの健闘を讃えあいました



御臨席総会まで、

あと100日：8月15日

青年会長様御臨席総会まで、残り100日となりました。

日頃は御臨席総会に向け、様々にお心寄せ、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。

「あと100日」と聞くと、まだまだ時間があるように感じます。でも、これまで準備を進めてきたことを振り返ると、100日という時間は決して長くありません。係員一人ひとりがそれぞれの持ち場で準備を進め、たくさんの方々へ声をかけ「オール笠岡」で、この日を楽しみに迎えられるようにしていきたいと思っています。

先の御臨席総会係員全体会議の場で大教会長様は「笠岡が一つとなって、一手ひとつに進めていきたい」とお話くださいました。

一手一つについて、3代真柱様は次のように仰っています。

私は、教会が教会としての使命を全うする上で、婦人会、青年会、学生会、少年会が独自性を活かして、お互いに連携を密に互い立て合い、互いに足ら

ぬところを補い、互いに自分達に与えられた分野の任務を全うして活動するということが、教会に調和ある一手一つの喜びを生み出す上で忘れてはならない要素である。（『3代真柱お言葉 教会内容の充実』道友社）

私は、笠岡の良さはタレント揃いである事だと思っています。個人、個人で優秀な人が多くおられます。そんな皆様のお力をお借りして、一手一つに向かう御臨席総会が今から楽しみでなりません！

一人ではできないことも、誰かと力を合わせることでできるようになる。一人ひとりの得意なこと、経験、アイデアを持ち寄ることで、自分たちだけでは思いもよらなかったものが生まれる。

今回の御臨席総会を、そんな「一手一つ」の喜びを感じられる場にしていきたいです。

「自分の係だからやる」のではなく、「自分にできることは何だろう」と、それぞれが一步踏み出す。そして、誰かの一步を別の誰かが支える。

そんなことを重ねていった先に、「オール笠岡」と呼べる姿があるのではないのでしょうか。

残り100日。

まだ100日ある、と考えるのか。

もう100日しかない、と考えるのか。

私は、「100日もある！」と思って、思い切り楽しみたいと思います。

一人ひとりの力をつなぎ、笠岡らしく、明るく、楽しく、そして熱く。

青年会長様をお迎えするその日を、みんなでワクワクしながら迎えられるよう、残り100日、一手一つに進んでまいりましょう！

（委員長 瀬藤 大喜）

談話室



芳井分教会前会長実兄の佐藤卓夫さん(100歳)からLINEでご寄稿がありましたので、ほぼ原文通り転載いたします。

（かさおか編集掛）

私はこの度 齢(よわい)100歳という破格のご守護を賜り感入(ひとしお)です。芳井分教会100周年に花を一輪添えていただいたような思いです。私は大正15年8月3日生まれ 芳井分教会

設立は大正14年10月11日 10ヶ月程差があります。私が体内に宿し込まれたのは この頃と推察できます。初代会長の長男として生まれ教会の庇護のもとに100年の歩みを重ねました。

私は間も無く到着するであろう齢100歳を思案して 一つのあることに気づいた。我が神は自らを月日と称せられた夜空を照らす月であり天空に輝く太陽である。一般には神は天にいる最高の存在者。万物を支配し また育み育てるものと考えられている。

しかし このようは神の体や 息一筋が蝶や花や とおっしゃっている私の体内に今も真つ赤な血が駆け巡っている。息を吸い込み吐いている。これこそが神の働き。そのものだ。この働きは時間とともにある。月日という時。一般には歳月。時間を意味する私の体内に神が存して働く其の時間長さが年齢であり寿命だ。私 佐藤卓夫は月日が働いているから佐藤卓夫なんだ。

私たち時間を図るため暦を作った。月日の月の動きは太陰暦に。日の動きは太陽暦になった。私の100年の年月。決して平安ではなかった。私の10歳代は戦時であった。



日本の国は戦争をしていた 私は戦場にこそ立たなかったが死の淵に立たされた

18歳の時 学徒動員先の工場で怪我をして破傷風という恐ろしい病気になった 呼吸神経の痙攣は窒息を引き起こし のうち回った心臓は何度も止まりかけた回復後 医師は言った 棺桶から這い出た と

19歳になったばかりの時 忘れもしない 学徒動員先の広島市内の工場にいた時 頭上で原子爆弾が炸裂した これ以上の生き地獄があるうか

8月6日午前8時16分だ 真っ白な閃光ピカ ドーンだ 防空壕に避難して 体に突き刺さった窓ガラスの破片を抜きあつた。が其の時 爆心地からの被災者の洪水 衣服は高熱で焼き焦

げ 顔 背中 足腰の皮膚がめくれた人たちが 助けてくれ と叫びながら倒れ死んでいった

生き地獄だった

私が居た所は爆心地から3キロあまり やけどや皮膚が捲れるということ はなかった しかし高い放射能を浴びた 爆心地を通って 倒壊した校舎の下敷きになって死んだ学友を引き出し 校庭に穴をほって埋めた それ以外にも何度か爆心地を通った 其の後 高い放射能の恐ろしさを知った 浴びた放射能により髪は抜け落ち下痢が続き 死に至ると報ぜられた 私は毎朝目覚めては髪の毛を引っ張った 抜けた数本の毛を見ては一喜一憂した 下痢が

続いた もうダメかもと悲嘆しながら 40日目だった 下痢ではなかった その翌日も 其の次の日も下痢しなかった 助かるかと思った

助かったのだと思うようになっていった 大戦は終わった 敗れた私達 は不戦 永久平和を誓った時は行き過ぎ 今や戦争を知らない人たちの時代 になった 日本の舵取りをする政治家 達は 殆どが戦後生まれだ 大国におもねり軍備の強化に走る 私はよくわからないけれど悲しい 私はいつい

までも平和でありますようにと祈るばかりだ

佐藤菊太郎 それは私の祖父の名前だ 孫の私は あえて偉大な匂いがけ人 種まき人と呼ばざるを得ない 寺に入り修行し学んだこともある 青年 菊太郎は 親さま出直し後怒涛の如く 広がり押し寄せてくる天理教の教えに 圧倒され魅了された 故郷捨てた伝道の拠点笠岡へと居を移した 天理教の 布教師として県内だけでなく県外までも駆け 私が所属する芳井分教会も祖父の布教によるものだ

祖父の一生は天理教の匂いがけ人 種まき人であった

私は誇らしく思う

私は この度 100歳という とんでもない通過点に到達するという御守護をいただいた そこには課題があるはずだ 疎いわたしには分からない 1日1日と御守護をいただいで生きてゆくことが皆様の励みになるかと思っ ている 1日というは生涯の心 と聞か していただいている 一日一日を感謝 し楽しんで生きていきたい 第二次世界大戦は私の青年期そのもの だ そして それは大きな傷跡を残した 命の危機にさらされた中学5年

航空機生産に関わる工場で負傷し破傷風を引き起こした呼吸神経の痙攣は窒息を引き起こし のうちした心臓は

何度もしまりかけた 医師曰く「棺桶のなかから縁にかかった指一本で這い出た」と言った でも衰弱した体は肺結核に侵され心臓に異変を引き起こした 戦後の混乱期 吐血しながら生き抜いた ご本部で務めるようになった時 「よろづ相談所」で診察を受けた 医師は京大出の長尾所長曰く「こりやもりようる(漏れているの意味)佐藤さん なあアメリカではなあ指先針金一本で治すそうな」と言われた 不治の心臓弁膜症の手術がアメリカで 始まったということだろう その後毎年 検診のたびに 他の医師も聴診器を胸に当て アレ！と言った しかし数年経った頃から何も言わなくなつた 保健所の医師も特に心臓異常を言わなくなった 後年長女の婿に話した 婿は医師である 弁膜症が治るはずがない 絶対あり得ない話だと言つてひかない

私は科学を肯定する 合理を尊重する でも私は神は合理を超えたもの 先の心臓のさわりについての守護それは神そのものと確信する

末の弟のまなざし

14し

▼道の上世界の上に残した功績

さて、豊明兄の50日祭の祭文を掲載してみる。改めてこの兄の成した業績の多きに目を見張るばかりである。

此れの上原の家の小床を払ひ清めて祀り鎮め奉る故の天理教笠岡大教会幹部承事 インディアナ大学名誉教授 上原豊明大人の神霊の前に天理教笠岡大教会役員上原繁道慎み畏み敬ひて白す阿波礼 久方の空往く月の清々しき御心に 此れの天理教教祖(おきし)の(まなざし)の世界一列救けの御教へのおくがを極め給ひて 遠く異国の アメリカはインディアナ州の此れの地にありて 忠実に勤しく己が務を重しみ奉りてありけるを 冴え渡り往く月に不意の群雲の立ち迷ふ障りある如く はたまた桜花爛漫の桜の梢に突然の吹き荒ぶ強き風のある如く 汝神霊はし現身の慣ひ得免れ給はずて 此れの親神の御量りのまにまに惜しくも出直し給ひてより親族家族は此れの家に小さき真床齋ひ奉りて朝な夕なに心さぶしみ在りし

世に神霊の残し給へる事共思ひ出でつつ片時も忘ら得ず 御葬の式仕へ奉りしを 昨日今日とのみ思ほしを 十日二十日は奴波玉の夢と過ぎ 阿波礼うたかたの流れと変はりて我が為に暫し留まる事とてなく 今日しも日を撰びなして 早や五十日の御祭仕へ奉るべき日とはなりぬ

故(む)御前に額ずき奉れば 早春の冷たき風に遠く故郷の笠岡大教会 神殿前(みまへ)の(まなざし)に咲き誇る梅の花思ひ出だす今日しも 巡り来たる歳毎に その花々を愛でし神霊の 懐かしき顔(おもて)を 御前に在はします如く またその温かき声 梢に吹き渡るさはやかな風の音にまぎれて 耳の辺りに何かを語り給ふが如 現世に在せし日々の事々偲び奉るに

汝神霊はし大正十三年十一月九日 真金吹く吉備の中津国笠岡の美(うつく)しき郷の 遠く明治の頃に設立されし笠岡大教会に 父・上原繁雄主 母・くにゑ女の四男として生れ給ふ 生来直く賢しく郷の学舎 笠岡男子尋常高等小学校に通ひては 郷の友垣との交はりも厚く 幼き頃を父母の広く深き慈情の中に育まれ給ひし 卒へては他の兄たちと同じに 福山誠之館中学に学び 更に

は父の君の台湾伝道庁(のたの)の(まなざし)長に任ざされてありし時なれば 遠く海外雄飛を心に台北帝国大学に入学なし 学問研鑽に志し給へり 時恰も先の大 き御戦の中なれば 昭和十四年長兄・道雄の君の戦死 また昭和二十年 次兄・郁雄主の広島市での被爆でふ禍事に相次ぎ遭ひ給ひし 然ありしも神霊はし 学問の道に更なる精進を重ね 戦終はりて後は故郷笠岡の地に引き上げ給ひて 新制なつた京都大学文学部に入学し給ひし また昭和二十三年には 学問の道に勤しむ傍ら 道の宝おさづけの理を拝戴なし翌年八月修養科を卒へ十二月には 教人と任ざされし 昭和二十五年京都大学を学び卒へては 戦後初の教会本部留学生として渡米なし幾多の研鑽の末 昭和三十一年南カリフォルニア大学に於いて博士号を取得なし給ふ 然ある中 昭和三十年一月 甲賀大教会部内ソーテル教会役員 佐藤定一郎主の長女・清子の君を嫡妻と迎へ夫婦の仲いと睦まじく長男・治の君を授かり 上原の家門高く挙げまして在り 厳しき学問の道の精進の中にありても明るく円やかな生活を送り給ふ 特に英語での博士号論文の執筆には 清子女の内助の功在りしと神霊より聞

きし事ありし また遠く米国の地に在りても 神霊はし常に此れの世界救けの御教への上 また笠岡大教会の上に心砕き 教祖年祭また大教会の節々の大 き催しには 必ずはるばる帰り来まして 伏せ込みひのきしんに汗し 大教会幹部として 四代会長 兄・郁雄主の相談柱として 懇ろに務めてありし また昭和三十六年五月カリフォルニア州 ブエナパークにミルトン・K・クリッチ フィールド氏を所長に笠岡寄所を開設なししなり また昭和三十八年からは 此の地のインディアナ大学東洋学部で 教壇に立ちまして 比較宗教学の道に 次々と業績を挙げ給ふとと共に アメリカの地での日本語教育に独自の境地を拓き給ひし 著書に 清瀬義三郎氏との共著の「Fundamentals of Japanese」を出版なしであり 更には助教教授 教授と次第に重しき務めに任けられては 後進の育成に心尽くし 親里ぢばの天理大学との交換留学生 交換教授制度 設立をなし インディアナ大学との姉妹校提携を実現し給ふ また昭和四十六年五月には 笠岡大教会神殿移転普請には 作庭にあたり 同大学教授の安田ケネス博士を招聘し二カ月に亘り作庭工事に共々に勤しみ給ひし

父の君たる大教会老会長夫妻はこの頃八十路に近き身ながら若き時台湾伝道庁長に任ざされてありし上から海外伝道への思い熱く昭和四十一年五十一年と二度に亘りアメリカ巡教をなし給ひしが神霊彼の地にありて常にその傍らに添ひて親孝心一条に通りましたも懐かしきも温かき想ひ出なりしさらには忙しき学究生活の中で英語圏での道の拡めを思ふ一心よりみかぐらうた おふでさきなどの英語試訳を出版なし また宗教辞典百科事典等の本教紹介記事に筆を執りまして米国の宗教学会では広くその名を知られ給ひし然あるにインディアナ大学では二十七年間に亘り数々の要職に携はり給ひて退いてはその功を讃へられて名誉教授に挙げられ給ふ

それよりは平成の世に入りて天理大学改革に神霊乞はれて帰国なし 同大学国際文化学科設立に寝食を忘れて尽くし給ひし 改革なりては 同学科主任を務めて在りしも この頃より神霊はも身上勝れ給はずなりて 天理憩の家庭院で診察受け給ふ事ありしも 気丈にその身を押して大学の上あるいは大教会の上に種々心配り日を送りなして在りしに 昨年 改革なりし大学も落ち着きましし上から身を退き給ひて米

国に帰り再び学究の道にいそしまんとして在りしを身上不意に嵩じ来まして病院に入り手術を受け あるいは清子の君に看護られてありしも 三月四日此の地のブルーミントン病院で七十二歳を生きの涯りと親神の御許に還り給ひし 誠に口惜しき極みなりし然あれど現世に生まれますも幽冥に旅立つもこれすべて親神の大き御心の御量りにしあれば 悲しき上にも心鎮めて現世の式に従ひて 親族家族参来集ひて御葬の業厳かに勤めまして 此の小さき真床に神霊はし齊ひ奉りて今日しも五十日の御祭仕へ奉りてあり異国の地の事とて直ちに神霊代を大教会祖霊殿に併せ祀る事はあたはずも明日より此の齊主及び副齊主 神霊を伴ひて 神霊の故郷・笠岡の地に至りて 神霊をば代々の先づ祖の神霊と共に大教会の祖霊殿に併せ祀り また御遺骨をば父母の君をはじめ長兄 次兄の主達の永久に眠り給ふ御墓処の奥津城深くに鎮め奉らる

最終回 木星異変と世界

天体情報から何をくみ取るか



第1回 小惑星の接近

"人類滅亡"のシナリオから読み取るもの




背中赤ん坊しよんべんしたんじやないか」兄は私と話してて、ついつい長くなると、そのことを私によく話した。さて次回、もう少し、この兄の事を書いてみたい。

上原豊明先生は、立教156年2月から11回に亘り「世界の話題」と題して『天理時報』「社会随想 道と世界」のコーナーに寄稿され、本誌にも『第45巻 第9号』から『第46巻 第7号』に亘って転載された。(編集掛)



鎮勇分教会に届けられた支援物資



大教会で積み込まれた物資

令和8年熊本地震 支援活動の報告

会長室

会長室(上原愛美室長は、7月28日に起こった「令和8年熊本地震」に際して、30日午前10時過ぎに直轄教会連絡網・HPのお知らせコーナーを通じて義援金・救援物資の協力を呼びかけ、同日夜半、大教会に集まった支援物資を熊本へ届けさせて頂きました。

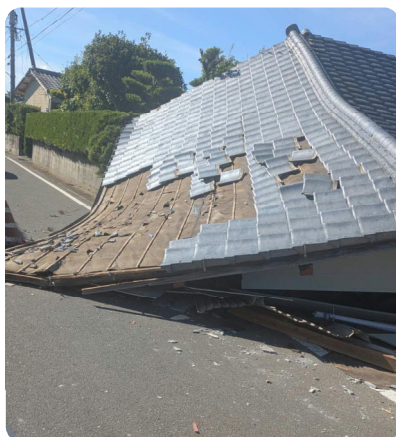
集まった物資はトラック一杯になり、30日の深夜12時に上原志郎・今川昌彦・岡崎治喜の3人で大教会を出発、7時間掛けて熊本市の鎮勇分教会(東神田部属)へ届けました。

教会に届けられた物資は、その日の内に教会の奥さん達の手によってライフラインが絶たれていた宇城市と八代郡氷川町の介護施設2ヶ所に届けられ、その後、松橋と八代に全ての物資が配布されました。

多くの皆様のお心寄せの物資と寄付金、被災地の人達の協力によって、多くの真実が届けられた事に感謝致します。有難うございました。

それぞれの教会や個人で熊本へ赴かれています。これから支援については、ニーズが日毎に変わって行きますので、連絡を取り合い、現地の方達の情報を聞きながら進めていきたいと思います。

(会長室員 上原志郎)



配布して下さった方から送られて来た氷川町の様子です



水道水が濁って飲み水にならない
宇城市の介護施設に届けられました

📌 詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- ・ 詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、**2日前までには、必ず詰所**へご連絡ください。
- ・ **食事をしない(宿泊のみの)場合**でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

七月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には「人間が陽気ぐらしをするのを見て神も共に楽しみたい」との
思召から ない人間ない世界をお創造下されたばかりでなく 昼夜を分かた
ず 天然自然のお恵みと身の内の御守護を下さり 陽気ぐらしへとお導き頂い
ております事は誠に有り難く勿体ない極みでございます 私共は日々朝夕に
御礼申し上げると共に たすけ一条の御用の上に努め励まして頂いておりま
す

その中にも今日の吉日は此れの笠岡大教会の七月の月次祭を執り行う日柄
でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び感謝の心も一入に 明
るく陽気に勇んで座りづとめてをどりを勤めさせていただきます 御前には
暑さ厳しき中にも今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが 相共
にお歌を唱和し 日頃のご高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまし
て 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖年祭の年の「こどもおちばがえり」が目前に迫って参りました
これまで声かけをした大勢の子供達と共に おちばに帰らせて頂き 陽気ぐら
しをさせてやりたいとの親心に少しでも触れてもらえるよう努めさせて頂き
ますので 何卒事故怪我等のないようお連れ通りの程をお願い申し上げます
また続いての学生生徒修養会高校の部や 大教会での英語講習会 少年会のサ
マーキャンプ等 夏休み中の行事を通して子供達の育成の上に力を注ぎたく
存じます

何卒親神様には猛暑の中にもご恩報じ一筋にたすけ一条に邁進する皆の誠
真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上により一層自由の御守護
を賜り お望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く建て替わりますよう
お導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十九年 七月月次祭 祭典役割割表

祭主		扈者		講話	役割 / 区分	地方		おつとめてをどり				笛	ちやんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓						
大教会長様	上原浩	吉岡誠一郎	田中隆之			佐藤道孝	横山逸郎	谷内秀自	大教会長様	前会長様	上原繁道										大教会奥様	前奥様	田中ますみ	門脇元教	中村剛史	吉岡壽
九月講話		指図方		田中隆之	座りづとめ	前 半		今川昌彦				山野弘実	虫明立生	門脇加津	横山小智榮	吉岡八恵	岡崎真一	赤木素志	高木昭祥	岡崎治喜	門脇元教	三代温生	内海史郎	三島照美	室悦子	高木孝子
布教推進講習会		上原志郎				後 半		中村剛史				上原志郎	吉岡誠一郎	浅野明教	武内正美	田中つかさ	上原千枝子	杉原善朗	岡田誠	佐藤真孝	三代温生	横山逸郎	内海史郎	三島照美	室悦子	高木孝子

大教会だより

◎こどもおぢばがえり

詰所受入ひのきしん

自 立教189年7月26日
至 立教189年8月4日
期間は個人により異なり、
各ブロック内は担当順

・東ブロック
皆 部 常 井 二三代
新山邑 三 島 美保子
吸 江 西 村 健
・西ブロック
神 驛 渡 邊 孝 信
大江橋 村 川 久 恵
大江橋 村 川 達 朗
葦 陽 村 上 久 史
・福山ブロック
福富士 藤 井 さとみ
福 芦 青 山 かずみ
福 山 田 中 真 実
・高屋ブロック
芦 品 青 木 茂 男
香地華 武 内 まさみ
・島根ブロック
照 雲 雜 賀 元 生
弓ヶ濱 森 川 道 弘

・上府ブロック
木津和 丸 山 周 太
府中市 奥 忠 郎
・その他、有志ひのきしんの方々



「生と死というものはあまり違いはないのです。この2つは常に1つのリズムとして我々の日常を流れていきます。そして、この体はただ衣服であり、本当の体はもっと奥にある。そして、それは永久に滅びません。」この一節は、「話の種」として私のパソコンに、10年前に保存したものです。

140年祭に向かう時旬に当教会では、40代50代80代90代と多くの用木・信者の方々が出直されました。みたまうつしをさせていただいた後に、不思議なたすかりや親から子へ子から孫への信仰のつながりの姿をお見せいただきました。不登校だった子が高校専門学校へと進学をして無事に卒業、用木となりました。一人前の社会人となって自立しました。ほぼ信仰が途絶えていた家のお

孫さんたちが、おさづけの理を戴いてくださいました。未信のお嫁さんが初席から満席まで運んでくださいました。ひきこもり状況に陥ってしまったいたお孫さんが、当教会になくてはならない教人のひとりとなってくれました。どれも、御霊様方のお力添えの賜としが考えられないような不思議なこととの連続でした。

未信仰の方も多く参拝される「みたまうつし」の後に、出直しについて話をさせていただきます。参考になっているのは、教典と天理教HPの一節です。「身上を返すことを、出直しと仰せられる。それは、古い着物を脱いで、新しい着物と着かえるようなもので、次には、又、我の理と教えられる心一つに、新しい身上を借りて、この世に帰つて来る。」(天理教教典より)「天理教では、人の死を『出直し』といいます。親神様からの『かりもの』である身体をお返しすることを指します。(略)死は再生の契機であり、それぞれの魂に応じて、また新しい身体を借りてこの世に帰ってくる生まれ替わりのための出発点であることが含まれています。」(天理教HPより)



2015年後期の作品「あさが来た」(主題歌「365日の紙飛行機」)の中で、自分の死を意識し始めた主人公あさの夫に対して、女子大学校初代校長が語り掛けた一節です。これって、天理教の出直しの教えと同じじゃないかと、思わずメモを取ってPCへ保存しました。

諭達第4号で真柱様は、「その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」とお諭しく下さいました。私自身、今世の中で、まだ危ういながらも、自身の信仰の根っこ(喜び)なるものを一つでも二つでも残して伝えていきたいと思っています。

(友)

試案 天理教笠岡大教会史

九月十八日 大教会新墓地陥穽

九月二十一日 新たに六十七柱の神霊を大教会祖霊殿に合祀

九月二十六日 品治分教会附属建物増築

十月二十一日 大教会役員任命

幹部承事…今川昌夫 藤井憲男 高田通昭

承事…今川昌夫 上原眞雄 岡本久善

准承事…岡崎孝志 中村剛 田林志計實 三島克巳 岡崎和夫

おつとめ奉仕人…山野喜美恵

十月二十四日 オーストラリアで布教公認

十月二十六日 西礼拝場堀方始めの土持ひのきしんに大教会から八百人参加

十月三十日 本部員・谷岡元太郎先生を迎え教会長講習会(一六〇人参加 三日まで)

日まで)

十一月二十二日 氷上分教会前会長・十倉一雄先生を迎え婦人会笠岡支部主催夫

人よふぼく大会挙行(五〇〇人参加)

十二月七日 第一回男鳴物(笛)研修会(二八人参加)

十二月 笠岡第十八卷第十二号から部内教会史の連載開始

この年、第八十三母屋笠岡詰所の建築がはじまった。その模様はかさおか第十八巻第六号から逐次掲載されている。また「ふしん日誌」として全工程が同じく第十八巻第九号から掲載が始まった。ご本部では三月二十八日 東西礼拝場ふしん事始お願いづとめが行われ、教祖百年祭へ向けての事業の一環がスタートした。

この年の大教会年間統計 初席者五百五十三人 おさづけの理拝戴者二百四十三人 修養科修了者百二十一人 教人登録五十九人 教人総数一千七百四十二人 よふぼく総数六千九百三人。全教よふぼく総数七十八万一千百九十二人。

昭和五十四年(立教百四十二年・1979年)

一月十六日 中山善司様 真柱継承者に推戴

一月二十日 ふしん常任委員会(この年 以後九回開く)

一月二十一日 大教会史編纂常任委員会(この年 以後九回開く)

二月四日 第二回男鳴物(笛)研修会開催(三六人参加)

二月二十二日 第三回男鳴物(笛)研修会(二六人参加)

二月二十六日 陽備分教会教祖お社取替

鎮座祭…三月十日

奉告祭…三月十一日

二月二十六日 引野分教会移転建築

旧所在地…広島県福山市引野町千九百六番地の一

新所在地…広島県福山市引野町三丁目三百八十一番地一

鎮座祭…昭和五十五年十月四日

奉告祭…昭和五十五年十月五日

三月五日 上原義彦本部員出直(九十一歳)

三月二十七日 第二十二回春季英語講習会開催(三〇日まで 七〇人参加)

四月一日 鼓笛講習会開催(四日まで 二九八人参加)

四月二十七日 布教要員研修会(四三人参加)

五月 立教百四十二年上半期布教実修会始まる

五月二十一日 月次祭後 久保初恵先生を迎え縦の伝道講習会(三〇〇人)

六月二日 広岡文太郎、長坂実子両先生を迎え少年会育成講習会(六〇人)

六月二十二日 婦人会長様 増田喜久子・山田登志子両先生を迎え婦人会笠岡支部第十二回総会開催(九〇〇人参加)

六月二十四日 第八十三母屋笠岡詰所第一期工事終了し真柱様御入込

第八十三母屋(笠岡大教会信者詰所)第一期工事竣工式におけるお話

この度、第八十三母屋第一期工事が、ねでたく竣工になりました。本日は、お招きを頂いて寄せて頂いたわけであり。まず竣工に当たって心からお祝いを申しますとともに、この建物の竣工を目ざして、種々お骨折りをなさったでありましょう皆さんの御苦労に、おねぎらいを申し上げます。ただ今は、大教会長様より、御丁重な御挨拶を頂きましたが、むしろ正直な気持ちを申すならば、お礼を申したいのは私の方で、皆さん方のお骨折りで、親里にこうして一つの母屋と呼ぶ建物が新しく増えたということについては、心から嬉しく思っているものでございます。それだけに、皆さん方のお骨折りに対して、厚くお礼を申し、おねぎらいを申したいと思う次第であります。まことに御苦労様でございました。大変、ありがとうございます。

引き続き、第二期工事に入ることとなりますが、北棟と呼ぶこの建物と、これから新しくかかっていく建物を、併せて笠岡の詰所としてお使い頂きたいと思うのであります。

そこで、母屋と呼び、あるいはまた詰所と呼びましても、お建物の持つ意義をいかに弁え、これをいかに使いこなすかどうかということによって、折角建て上げた建物が、有意義にもなれば、あるいは無意味終わってしまうことになると思いますので、この機会に、私の、この建物に期待する思いの一つを取りまとしてお話し申して、本日の御挨拶にいたしたいと、このように考えるわけであり。ます。

御承知のように、詰所と呼びましても母屋と呼びましても、なるほど、呼び名は違いますが、その建物は、おちばへ帰って来た人が、出入りする建物なのであります。したがって、おちばへ帰って来る人がないならば、建物の意味はないのであります。また、おちばへ帰って来る人の数が、多ければ多いほど、大きな建物が必要とするのであります。少なかつたならば、小さな建物で、事足りるのであります。

この度、皆さん方のお骨折りによって、この建物を建てたということは、先程から聞けば、一千人の人が寝泊まりできるように計画した、という

話でありますので、その建物を有意義に使用するためには、やはり帰参者が多いということが求められるわけであり。ます。そこで、私は、皆さん方がおちばへ帰って来られるその事自体が、果たして、私たちの信仰生活の上で、どのような意味を持つているのか、ということをも、まず考えてみるならば、詰所の持つ意味も、あるいはこれをどういう気持ちで運営していくかということも、はつきりするだろうと思うのであります。

おちば帰りということは、私は、私達の信仰上、欠かすことのできない重要な位置を占める行為だと考えております。なぜならば、おちばという所は、親のおわす所であるから、親を思うなら、当然、子として、慕わざるを得ない。親を慕うならば、やはり親を求めてかえって来るということが、おちば帰りの私たちの意味である。こういう言葉で説明すると分かりやすいかと思ひますので、表現いたしますならば、おちばという所は、帰らなければならぬ場所ではない。むしろ帰らせてもらわずにはおれない所なんだ、こういうふうにお考えを頂きたい。それは、今申しましたように、親神様の深い思召を思案し、今は私たちの目で、じかにお姿を拝することはできないけれども、教祖が御存命でおわすということを考えるだけで、おちばという所は、恋しくなってくる所である。これは、みかぐらうたの中にも触れておつてくださるのであります。

私は、親の思いをたずね、考えれば考えるほど、帰らせてもらわずにはおれない恋しいおちばとなってくるに違いないと、このように考えているのであります。

そこで皆さん方は、今回もおちばへかえって来られたのであります。おそらく、この度は、この建物の竣工ということの一つの目的として、この機に会わせてもらおうというのでかえって来たという方が多いでしょう。しかし、初めてかえって来た人もおられましようけれども、今日の場合は、私は、むしろ、今までからも何度もおちばへ運んで来た人が多いと思ひます。

そこで、皆さん方が、今まで何度も何度も度重ねておぢばへかえって来られたそのうちにも、改めて振り返ってごらんない、きつとその都度その都度、多少違った気持ちを持って、おぢばへかえって来たというようなことにはならないでしょうか。例えば時には、教会長はおぢばへ招集されたんだというので、私は教会長だから帰らなければならぬんだというので、その招集に応えて、とにかく帰って来たというようなこともあったでしょう。あるいはまた、親神様から一人の病人を与えられて、何とか救ってもらいたい、それがためには、どうしてもおぢばへ帰らせてもらわずにはおれない、ということ、取るものも取りあえず慕うて帰って来たおづば帰りの日もったでしょうし、その都度その都度、考えてみたならば、心に何か非常に求め、親神様を慕い、親神様にすがりつきたい気持ちを持っておぢばで帰って来たおぢば帰り、あるいは、そのときは当然おぢばへ帰るのだというので、役目柄帰って来た等、振り返ってみたならば、その時その時、いろいろな気持ちを持っておぢばへ運んでおられるに違いないと、想像するのであります。しかし、私は、いずれもが、おぢばへ帰って来たというその事実を、親神様に御覧頂き、受け取って頂いたということにおいては変わりはないにしても、親が恋しくて、取るものもとりにあえずずっと来て来たその時の気持ちと、あるいは役目柄、何となく帰って来たその時の気持ちと、果たして、親神様は、どういうふうに私たちのその心を御覧になっているだろうか、受け取っておられるだろうかということを考えたならば、私はいろいろと心に浮かんでくるのであります。

詰所というものは、母屋という建物は、そういう人が出入りする建物なのであります。時には短時間、あるいは時には長時間にわたって寝泊まりをし、あるいは足腰を伸ばし、その教会にかかわる人が、その教会の詰所、母屋と称する建物に出入りするものであります。言い換えたならば、この建物は、笠岡にかかわる皆さん方が出入りしてくださる建物なのであります。そしてただ単に出入りするだけではないに、

ここへ出入りすることによって、少しでも親心に近づかせて頂けるような心へと成人して頂くための、一つの場ではない。だから、折角、自分たちの丹精によって建て上げた建物が、ただ建て上げたんだというので、俺たちの役目は、それで終わったと考えるのも、ひとつの考え方なら、折角、みんなが真実を集めて建て上げたこの建物は、更にまた、みんなが心をひとつに揃えて、みんなの真実によって、その建物の意味にふさわしく、これからこれを使っていくんだ、という気持ちを新たに心に持って頂きたいのが、私の今日、皆さん方に希望したいことなんです。

それには、今申しましたように、皆さん方は、一方では一人でも多くの人たちを連れて帰らせてもらうということを、自分が帰ることと併せて、常に心に持って頂きたい。自分が帰らせてもらうということ、併せて一人でも多くの人たちを、その機会に連れて帰るということに、更に努力を払って頂きたい。その上更に、連れて帰ったからというて、仕事が終わったのではなくて、やはり一度は一度、二度、三度と、度を重ねる度ごとに、その人もまた、新しい人を連れて帰らせてもらいましょうというような心へと進んでいくように、やはり丹精をしなければならぬ。これも皆さん方の心にかけておってほしいことなんです。

一つには、一人でも多くの人たちを連れて帰る。そうしてその人たちを、一つには育てるということ。この二つのことを、皆さん方が一人の人でやらなければならぬ。これが、私は、教会長であり、布教師であり、よふぼくの、親神様に応えるところの与えられた勤めであると考えて頂きたいのです。そうして、その時に、教祖ならば、どういう心を持って、こういう時には進められるだろうかということ、常に念頭において頂いて、事を考えて頂くならば、改めて、これからどうしてこの建物を運営していくかと、難しい会議を開かなくて、自然のうちに、この建物は、建物にふさわしい機能を発揮していくと、私は信ずるのであります。

どうぞ、皆さん方の真実で、折角建物を建てたのであります。更にこの上は、皆さん方の真実で、立派に、この建てた建物を、おちばへ帰つて来た人たちが成人する上に、有意義に使つて頂きたい。そうして、それが、親神様にお喜び頂く皆さん方の応うる道だと、私は考えるのであります。

本日、この第一期工事がめでたく竣工しました佳き日に、お目にかかりました機会に、私の気持ちを取りまとめて率直にお話申して、参考に供し、御挨拶に代えさせて頂く次第であります。おめでとうございました。

文責者 上原 郁雄

七月十日 ペルーで布教公認

七月二十六日 驛家分教会神殿屋根葺替及附属建物増改築

遷座祭…九月十日

鎮座祭…十月七日

奉告祭…十月八日

七月二十六日 神驛分教会親神様・教祖・祖霊様お社取替及教祖・祖霊様神床位置変更 神殿屋根葺替並増改築

遷座祭…九月六日

鎮座祭…十二月三日

奉告祭…十二月四日

七月二十六日 こどもおちばがえり第一団出発(高屋 二九日まで)

七月二十九日 こどもおちばがえり第二団出発(神邊 八月一日まで)

七月三十一日 こどもおちばがえり第三団出発(福山 八月三日まで)

八月一日 こどもおちばがえり第四団出発(直轄 四日まで)

八月六日 第二十三回夏季英語講習会(九日まで 七一人)

八月二十一日 教会長配偶者講習会(九〇人)

八月二十三日 こかん様に続く会開催(三五人)

八月二十六日 府庄分教会四代会会長佐藤サダコ任命(三代会会長佐藤馨 昭和五十

三年八月七日出直)

就任奉告祭…九月十六日

八月二十六日 東水島分教会神殿及附属建物建築

遷座祭…九月十一日

鎮座祭…昭和五十五年五月八日

奉告祭…昭和五十五年五月九日

八月二十六日 米府分教会建築模様替及附属建物増改築

八月二十八日 タイで布教公認

九月二十一日 布教実修要員研修会

九月 立教百四十二年下半期布教実修会始まる(十二月まで)

九月二十六日 呉照分教会親神様・教祖・祖霊様お社取替及神床位置変更並内部改造

鎮座祭…十二月八日

奉告祭…十二月九日

九月二十六日 福南分教会神殿及附属建物建築

鎮座祭…昭和五十六年四月十一日

奉告祭…昭和五十六年四月十二日

九月 立教百四十二年下半期布教実修会(十二月まで)

十月二十五日 笠岡大教会史、部内教会史、上原佐吉伝を本部史料集成部に提出

十一月四日 少年会おつとめまなび総会開催(六〇〇人)

十一月二十六日 新山邑分教会建築模様替及附属建物増改築

十二月十九日 ホンコンで布教公認

十二月二十六日 芦岡分教会二代会会長石川政子任命(初代会会長石川治郎助 昭和五十四年七月五日出直)

就任奉告祭…昭和五十五年三月八日

十二月二十六日 廣町分教会建築模様替、神殿建築及附属建物増築並内部改造

遷座祭…昭和五十五年一月十四日

鎮座祭…昭和五十五年十月十一日

奉告祭…昭和五十五年十月十二日

十二月 小鼓研修会終了(十一・十二月に五会場で九〇人参加)

この年の大教会年間統計 初席者六百五十八人 おさづけの理拝戴者三百八十一人 修養か修了者百四十人 教人登録九十九人 教人総数一千八百三十六人 よぶく総数七千六百六十七人。全教よぶく総数八十万二千七百八十一人。

昭和五十五年(立教百四十三年・1980年)

一月二十一日 大教会史編纂常任委員会(以後この年十二回開く)

一月二十七日 世話人・井筒敏夫先生 大教会役員、教会長に講話(第八十三母

屋笠岡詰所)

一月二十八日 西礼拝場棟上げのおつとめ

二月二十日 ふしん常任委員会(以後この年四回開く)

二月二十五日 青年会四代会長に中山善司様推戴

二月二十八日 布教推進要員実修会

三月二十三日 第三回母親講座開催(二〇〇人)

三月二十六日 湯田原分教会四代会長高木昭祥任命(三代会長高木一夫辞任)

就任奉告祭…四月六日

三月二十七日 第二十四回春季英語講習会開催(三〇日まで 八〇人)

四月一日 少年会鼓笛講習会(三一五人 四日まで)

四月 立教百四十三年上半期布教実修会(七月まで)

五月三日 大教会准承事・葦陽分教会二代会長笹尾孝夫出直(八十一歳)

六月五日 大教会承事・陽備分教会四代会長虫明昌平出直(六十歳)

六月七日 川本義昭、川田初恵両先生を迎え少年会育成講習会開催(六一人)

六月二十一日 土佐元先生を迎え布教所長躍進の集い開催(一一四人)

六月二十六日 吉舎分教会建築模様替

六月二十五日 第八十三母屋笠岡詰所第二期工事終了し南棟竣工、真柱様御入

り込み

七月十七日 大教会理事・島根分教会四代会長夫人門脇章子出直(七十七歳)

七月二十六日 こどもおちばがえり第一団出発(直轄 二九日まで)

七月二十九日 こどもおちばがえり第二団出発(福山 八月一日まで)

七月三十一日 こどもおちばがえり第三団出発(神邊 八月三日まで)

八月一日 こどもおちばがえり第四団出発(高屋・久松 四日まで)

八月五日 第二十五回英語講習会開催(一一三人)

八月二十二日 梶本まさみ先生を迎え婦人会女鳴物講習会開催(三四人)

八月二十三日 かん様に続く会開催(三四人)

八月二十六日 富松義晴先生を迎え教会長講習会開催(一二二人)

九月二十一日 布教実修要員研修会開催

九月二十五日 山田おあや先生を迎え婦人会委員長研修会開催(一二〇人)

九月二十六日 陽備分教会五代会長虫明好美任命(四代会長虫明昌平出直)

就任奉告祭…十一月九日

十月二日 大教会准承事・照陽分教会三代会長中村英夫出直(五十九歳)

十月二十六日 大教会長長男・上原理一 本部青年に登用

十月二十六日 弓ヶ濱分教会移転建築

旧所在地…鳥取県米子市大篠津町九百五十四番地

新所在地…鳥取県米子市大篠津旭が丘の二

遷座祭…十月二十八日

鎮座祭…昭和五十六年三月六日

奉告祭…昭和五十六年三月七日

十月二十六日 弥高山分教会附属建物改築

十月 立教百四十三年下半期布教実修会(一二月まで)

十一月十五日 大教会長長男・上原理一、きよの結婚式

十一月二十三日 主年会おつとめまなび総会開催(七〇〇人)

十一月十六日 府鮮分教会三代会長奥忠郎任命(二代会長奥忠儀辞任)

就任奉告祭…昭和五十六年一月十一日

十一月二十六日 府鮮分教会建築模様替

十一月二十六日 陶山分教会五代会長大平於石任命(四代会長大平太郎 昭和五

十五年六月十九日出直)

就任奉告祭…十二月十四日

十二月十五日 真柱様、上下分教会に巡教

十二月二十六 三郡分教会附属建物増改築

この年、一月二十八日御本部西礼拝場の棟上げおつとめがつとめられた。また二月二十五日には本部青年会四代会長に中山善司様を推戴した。三月二十七日にはおやさとやかた西左第五棟が竣工した。大教会では六月、第八十三母屋第二期工事が終わり北・南棟また会長宅が竣工した。こうしていよいよ教祖百年祭への歩み十年の半ばを終えた。

この年の大教会年間統計 初席者五百四十四人 おさづけの理拝戴者三百四十二人 修養科修了者百六十二人 教人登録者八十五人 教人総数一千九百十一人 よふぼく総数七千三百五十六人。全教よふぼく総数八十一万八千三百九十五人。

昭和五十六年(立教百四十四年・1981年)

一月十四日 大教会承事・恵陽分教会二代会長藤本正樹出直(八十八歳)

一月二十日 大教会史編纂常任委員会(この年、以後十九回開く)

一月二十六日 春季大祭に真柱様から諭達第三号発布 教祖百年祭準備委員任命

諭達第三号

教祖が、一れつ子供可愛い親心から、やしろの扉を開いて、世界ろくぢに踏み均しに出られ、御存命のお働きをもって、たすけ一条の道の先頭にお立ち下されてより、既に九十余年、来たる昭和六十一年一月には百年を数える。我々は、教祖百年祭を執行るにあたり、その元一日を振り返り、親心を偲び、今後の決意を新たにしたい。

百年は十年を十度繰り返して過ごした年月の重さを物語る。百という字の意は、白紙に戻り一より始めるを謂う。

親神様は、人間を創造られる時、九十九年毎に三度の出直しを繰り返させて、生み且つ育てられた。人間は、五分から生まれ五分五分と成人し、生まれ更りを重ねて今日を迎えた。

教祖百年祭の意義は、立教の元一日をたずね、ひながたをたどり、さらに、子供の成人を急ぎ込んで御身をかくされた元一日にかえり、親神様が人間世界を創造り給うた元初まりの思召である陽気ぐらしを实践することにある。

天保九年十月、親神様は、「我は元の神・実の神である。」と啓示られ、教祖を神のやしろに貰い受け、初めて人間世界に現れ給うた。以来、教祖は、世界一れつを救いたいとの親神様の思召のままに、神一条・救け一条の道を歩まれ、五十年の長きにわたって、やまさかやいばらぐろふもがけみちも、心明るく通り抜け、真実の限りを尽くして寄り来る人人を育て、つとめの完成とさづけの徹底をもって、この世が陽気ぐらしの世界と立て替わるよう図られた。しかるに、親を慕い親を思う子供の情愛は、親に従う事の尊さを承知しながらも、容易には親の道に踏み切れなかった。教祖は、こうした子供の心情を不憫と思召され、定命を縮めて御身をかくされた。

しかしながら、教祖は、姿はかくしても存命で働く、と仰せられ、おことば通り、世界たすけに夜昼の区別なくお働き下されて、その御導きは末代に及ぶ。

刻限に、「ひながたの道を通らねばひながた要らん」と仰せられている。